

# 1—ふつうの暮らし

## 「自然」からの出発

任運荘が開所して十年たった頃（昭和60年）、私たちは立ち止まり、ふり返り、わがホームのめざして来た目標は何だったのか、どう性格づけるべきかと、自覚的反省を深く迫られた。

手探りのがむしゃらの歩みであった。受け継ぐべき何ものもなかったことは幸せであった。空白からの出発は、まるで、一点一画を白紙に記すようなもので、よかれあしかれ私たちの足跡がはっきり印されることであり、お年よりとの協同作業が、泣き笑いのうちに刻印されていくことであった。

その中で、私がいま明確にとり出せるものが一つある。それは、自然に従っていたことであり、自然にしたがうことを何よりも大事にしたことである。自然を離れては、人為的になり、やがて、偽善性を帯びてくる。また、自然に従っておれば、手探りでも、正しい方向を見失うことはない。



例えば、今も暮らしの中心をなすものに「朝の集い」がある。これは家を恋しがって泣き崩れるひとりの婦人のために、そのひとと共に阿彌陀様にお祈りをしたことから始まったものである。一人、二人と増えていった。いつの間にか常に三十人ていどになり、毎朝の行事として十三年を迎えている。ひとりのための祈りから、多くの人の祈りとなる。一日も中断はない。

「任運大学」もひとりの声から始まった。それまでは月一回園長との懇談会があった。数年たって、ひとりの老人が「文句をいってもつまらん。町では老人大学がある。私たちも勉強したい」と訴えた。今さら勉強などいらん、と強い反論もあがる。それでは、希望者だけでもこの大学が発した。反対した婦人はそれから十年になるが、一度も出席したことがない。それも自由。このように、任運荘のすべての行事、運動会でも旅行でも誕生会でも、自由参加である。いや行事だけではない。暮らし方も各自の自由である。入浴と食事時間だけは一定しているが、それ以外は総て自由。自由が自然だからである。

『老人生活研究』で、老人に教育あり押しつけありなどと話題になった任運荘の「日記運動」(同誌61年10月号)も、自由意志から出発したものである。集会室のテーブルに一冊の落書き帳を置いたら、何人かが書きこんでいる。それなら、希望者には一冊ずつ自分専用の帳面をあげましょう。それが、ある人には落書き帳のままであったり、ある人にはひそかに書きこむ日記帳になっていった。ごくふつうの歩みであるが、書けるはずはないと勝手に思い込んでいた私たちこそ笑われるべきである。書き続けている人。たくさんのおっぱを向いた人。途中でやめ

る人。新しく始める人。書くことも自然、書かないのもまた自然。

私はルッソーの『エミール』の中の根本思想「自然」を、ここで強く意識する。

### 立脚地点定まる

十年を経て、自覚的反省はようやく任運荘の性格を明確にすることができた。お年よりにとって、ごくふつうの暮らしのあるホーム、あるがままに暮らしていけるホーム。それが任運荘である。

時に、老人ホームのある試みがマスコミに注目されることがある。それですます試みに熱中する。ついには、老人不在のまま、老人の意志とは無関係、あるいは、それを無視して、人目を引き、新奇なことを盛大に展開する。こんな賑やかなホームの出現を、私は悲しむ。

平々凡々、静かなホーム。そのように消極的にしか表現できない性格のホームを、自覚的に確立していこう。

おこがましいが、このようなホームを積極的に表現するとすれば、ここを天国に一番近く、にしたいということである。平屋建ての壁は黒ずんでみすばらしい任運荘、それが天国に近い所。ひとは笑うだろう。でも、私たちは目標をそこにおくことにためらわない。

「まえがき」冒頭で見たように、羽田野モモエさん（当時九五歳）は任運荘開所記念日に当たって、こう詠んでいる。

もろともにありがたく思うや日の本のこは楽土の任運莊かな

羽田野さんの熱い想いであり、憧れである。彼岸に至らんとするまでの一時のやすらぎを、ここ任運莊に求めやまないのである。だから、私たちはそれに応えねばならない。その楽土の内容を、具体的には、ふつうの暮らしがまちがいなくここにあることと考える。

### 楽土の条件

ふつうの暮らしとはどんな暮らしか。少なくとも、「家にしあれば」という思いを起こさない、ホーム暮らしをかこつことのない暮らしである。ホームは雑居生活、だからそんなことは全く無理な話というかもしれない。しかし、雑居生活を終の棲み家とせねばならぬ運命を、ただどうにもならない運命的なものと決めてしまうことをしたくない。

では、ふつうの暮らしをホーム生活の中で具体的に実現するためには、どうあらねばならないか。家庭並にするためにはたくさんの条件が充たされねばならないだろう。私たちの経験は、最低限度、次の条件だけは用意せねばと教える。六点があげられる。

第一に、おむつが濡れたらすぐ換えるという随時交換を実践する。説明するまでもなく、生理的苦痛や人間の尊厳主張の両面から見て、このことは老衰した人間への最低限度の配慮でな

ければならない。濡れても知らずことのできない老人に重点がおかれることも当然である。乳児は泣いておむつの濡れたことを知らせる。老いの尊厳はこの苦痛に耐えても泣くことはしない。ひとりの人間の尊厳を守りえないでは福祉とはいえない。

おむつをするようになった老人は、もはや、尊厳を主張する資格はない、と声高にいう破廉恥な大学教師Tがいた。また、それに同調して自分らの怠惰をごまかしている福祉従事者群が現在存在している現状だから(朝日新聞・58・11・4)、このことを改めて明記しておこう。

第二に、床ずれを作らないことである。衰弱しゆく中で、専門的介護を受けながら傷を作られていくのでは、何の介護であり看護であるのか。弁解し難いだろう。やがて介護が専門職として格上げ(?)される新段階で、また、老人保健施設が大量に出現する新事態を前に、このことがしっかり問われねばならぬ。

第三に、雑居部屋生活から少しでも主体的人権を守りうるのは、間仕切りカーテンしか残されていない。「間仕切りカーテンをきちんとしてあげよう」。たかがカーテン、しかし、それのあるなしは、お年よりにとって天地の差であろう。

第四に、「施設にありがちな悪臭の消滅」。ある秀れた痴呆症専門の施設を記録映画にされた監督に、私は問うたことがある。「その施設の処遇内容は敬服する面もあるが、棟内にたちこめるあの悪臭をどう思うか」と。答えて、「相当臭う。私は、しかし、施設はすべてそういうものとはかり思いこんでいた」。ふつうの家庭に悪臭はない。私たちは施設でそれを実現する。

第五、「ぼけ老人の問題行動はお世話に問題があるから発生する」という原則を堅持しよう。稀に例外はあろう。過去十三年間に、力不足で、ついに精神病院行きとなったのが四件あった。以上の五点の実現は、現場からすれば、大変なことというひと多からう。一点だけでも大変だのにと。たしかにその通りである。しかし、一点を実現することは、必然的に、他の四点の実現を導いている。五点は一つである。

この五点は生理的面と設備的物理的面に現れるので、やる気さえあれば実現は可能であり、その結果も目にみえる。しかし、第六点めは全く精神面に關すること、その内容も簡單明瞭ではない。

### 己にするが如くに

第六点とは、「お年よりの自由意志を束縛しない」ということである。次章で詳しく論ずる任運莊の「日記書き」を例にとろう。それまでは表に出ていなかった日記を書くという意志を、いつのまにか本人の心の中で具体化さすことも、自由意志の尊重である。できる意志、する意志、したい意志、これに機会を与えないで閉塞させているとすれば、（じつは、施設とはその過ちを犯しやすい場所であるが）それも重大な自由の束縛である。反面、書きたくもないのに、書かそうとすることも重大な自由の束縛であることはいうまでもない。ただ、前者については、案外無頓着になりがちである。そのことへのきびしい自己反省がホーム側になければな

らない。

さて、入所者の意志が束縛されていないかどうかは、お年よりの抗議や悲しみ等の態度反応に現れることもあるが、常にそのことは抑制ぎみであり、私たちお互いが自らの胸で検証するしかない。そのことは、しかし、極めて高度の人間の教養が要求されていることである。教養とは、自分が欲しないことはひとにもしない、自分にして欲しいことをひとにもする、という情操である。

たしかにその情操と行為は極めて高度のものである。しかし、その日々の実現をホームでめざさない限り、ホームが生活の場であることはできない。

禁止、抑制がない。押しつけない。叱らない。辱めない。説教しない。指導しない。任運莊は開所以来、規則と日課を持っていない。その必要を感じたことがなかった。(注32参照)

では、抑制、他律的教育がないということは放任することだけだろうか。替めること、励ますこと、勧めることなどはどうだろうか。自由意志を束縛しないということは、必然的にこの問題にも至らねばならない。

以上の六つの項目について、各章毎に詳しく記さねばならない。まず、第六項目の「自由意志」の問題を先にして、次章でふれよう。